## ４　養鶏場における野生動物実態調査

中丹家畜保健衛生所
○島村優理　矢野小夜子

【はじめに】高病原性鳥インフルエンザの発生予防において野生動物対策は野鳥とともに重要である。養鶏場の実態を把握し、今後の対策の基礎資料とするため、野生動物の侵入状況等を調査した。【方法】1,000羽以上の養鶏場18戸（採卵鶏9戸、肉用鶏9戸）を対象に農場への野生動物侵入状況、動物種、被害の有無、対策等を聞き取り調査した。また、モニター農場に赤外線カメラを設置し、野生動物の動向を調査した。【結果】過去2年間に農場内で野生動物の目撃あるいは足跡等を認めた農場は16戸で、地域や鶏種を問わずイノシシ、シカが最も多く、次いでキツネ、イタチの順であった。被害を受けた農場は9戸で、被害内容は鶏の圧死（肉用鶏）や捕食（採卵鶏）、施設の損壊などで、動物種はイノシシ、イタチ及びテンが主体だった。被害農場は全て再発防止を徹底し、侵入路の閉鎖（イタチ、テン）、電気柵や鶏舎間の柵（イノシシ）などが有効であった。モニター農場では、鶏舎周辺でイタチやネズミを、農場敷地内でシカ、キツネの侵入を認め、カメラ設置は活動時間帯や侵入路の把握に有効であった。【まとめ】野鳥と比べ野生動物の制御は経費的にも難しい面もあるが、今後振興局の助言を得て、野生動物の侵入防止とともに、消石灰散布の励行等で農場防疫の強化を図りたい。